1988年６月18日第三種郵便物認可　毎月１回20日発行

［月刊］

キャッチピース

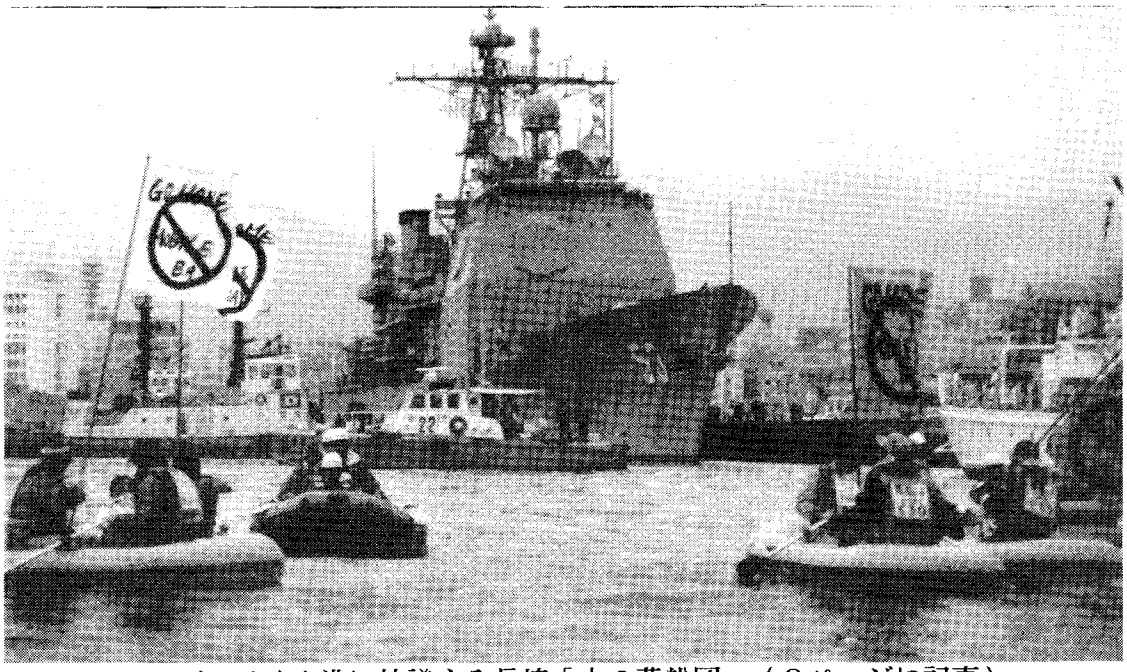
月刊トマ喰い虫改題

7

通巻８６号
１９９３．２

定価●１００円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！
米軍基地を撤去しよう！
反核運動を継続し、核廃絶を！
憲法９条を世界に！
市民による平和政策を提起しよう！
草の根の国際共同作業をすすめよう！



モービルベイ入港に抗議する長崎「木の葉船団」（８ページに記事）

ＰＫＯ第２次派兵－人間の鎖で抗議しよう！

新防衛予算・ここが問題／「思いやり予算」って何だろう？

再開されたチームスピリット／沖縄発ＵＳＡ平和の旅

★維持会員（月間）
個人　１口　1000円
団体　１口　2000円

★参加会員（月間）
個人　１口　500円
団体　１口　1000円

★通信会員　年間　3000円

＜会費は本紙購読料をふくみます＞

脱軍備ネットワーク
キャッチピース

連絡事務所●〒223　横浜市港北区箕輪町3-3-1
TEL 045(563)5101
FAX 045(563)9907
郵便振替●東京6-136148　口座名「キャッチピース」

あなたも会員・読者に！

新防衛予算の危険度チェック

手にいれた海外侵略能力

ドンも批判の兵器買い込む

現在国会で審議中の（はずの）九三年度政府予算案では、軍事費の総額四兆六四〇六億円を要求しており、前年度に比較して一・九五％の伸びである。これが三十三年ぶりの「低い」伸び率と大きく報道されるほどだから、いかに軍事費が聖域化されていたかが改めて再認識できる。大蔵省は当初、冷戦終結と財政難を受けて軍事費の減額を防衛庁に提示していた。しかし軍縮の先例を作りたくない防衛庁の必死の反攻で、結局増額に落ち着いたのである。

「正面装備」を「抑制」したとは言え、世界一高価な九〇式戦車（かの金丸信さえ戦車が使われるときは日本がおしまいなときと批判したにも拘らず）、昔ワインバーガー国防長官さえ「日本が高性能な攻撃機を持つことは憲法に違反する」と指摘したそのFSX（次期戦闘爆撃機）の試作機、渡辺美智雄外務大臣が最近「ソ連がなくなった今、いったいいつ使うのか」と指摘したF－15やAWACS（早期警戒管制機）、多連装ロケット、イージス艦（どれも同種の兵器では世界一高価）などなど、他の国ではちょっと真似できない豪華な兵器を買い込むことを盛り込んでいる。

とても平和主義者とは言えないこれらお歴々の「批判」さえ無視して防衛庁が冷戦型兵器を買い込むのは過去の習性であるから無理はないとしても、驚くべきは世論がこのことに全く反応しないばかりか、「言論の府」たる国会でもほとんど議論になっていないことだ。「佐川」追及で忙し過ぎるようにはとても見えないのだが。

「土俵伝説」は終わった

日本の国会でいわゆる防衛論争が行われなくなって久しい。七〇年代前半までは国会審議が止まるような論戦と言えば「安保・自衛隊問題」だったが、この二〇年間では、七八年の「有事立法」論議と昨年の「PKO法」問題を除いては国民の耳目を集める議論は行われなかった。しかもそれが、この間日本が「平和国家」の模範的な道を歩み続けるどころか、軍事費だけでも二〇年間で5倍、この間に具体的な「日米共同作戦計画」も策定され、「憲法の精神に沿って」自衛隊が海外に派遣される「発展」ぶりの中でそういう状況なのである。

すでに八〇年代の後半に安保問題に詳しい（？）社会党議員はこう述べている。「いま、防衛論議をやれば、政府側がどんどんタブーを破る発言をしてくるんだ。何も聞かないことが防衛政策を進めさせないことになる」。要するに何もしないことが「阻止」に直結するという、まことに楽な立場に野党は置かれているのだという。スローガン的に言えば「敵の土俵にのるな」というこの立場は、六〇年安保の際真剣に安全保障論議を行った社会党のやり方や民主政治の根本原則とはかなり隔たるとは言え、不勉強でも平和運動を可能にする至便さから、わが国では一政党の枠を超えて広がっていったように思われる。

しかし野党は確かに「土俵」にはのらなかったものの、その後も政府の「タブー破り」は続き「戦わずして勝つ」はずだった野党戦略は破産した。しかも突然の冷戦の崩壊で「防衛政策」を根本的に問い直さねばならない時代になっても政府は過去の惰性で軍拡を続けており、もはや「土俵拒否」論は政府に対する隠れた応援歌でしかない。

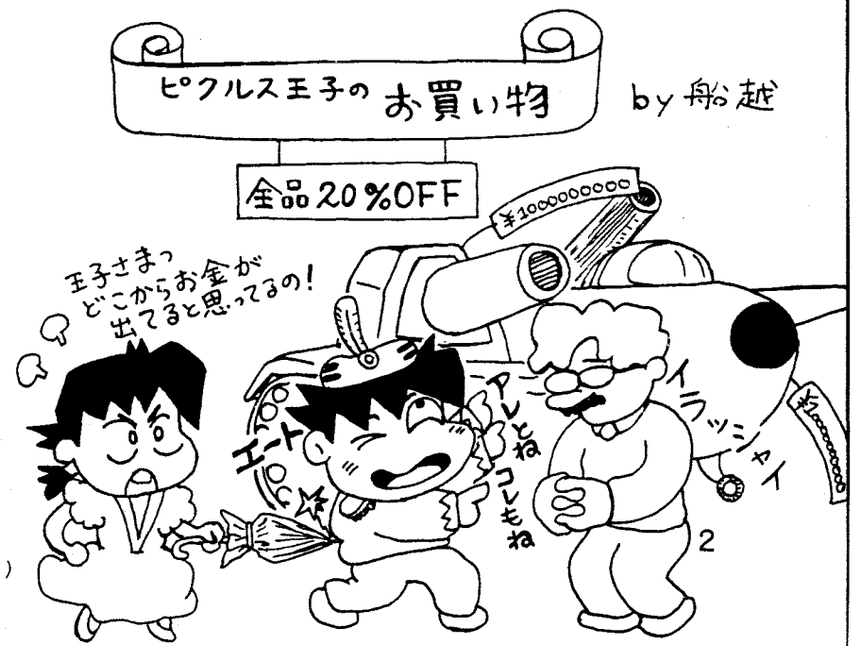
AWACSを「早期警戒」

今年の予算の最大の目玉は何と言ってもAWACS（エーワックス）である。1機五百七十億円という値段（足元を見られてアメリカに価格を倍にされた）もすごいが、財政難しかも「ソ連の脅威」も消滅した今、高度な空中戦を指揮する「専守防衛」から限りなく遠いこの「空飛ぶ司令室」を計四機も買おうという、国民や国会をナメ切った防衛官僚の決断がスゴイ。

もちろんこの決定は防衛庁の独断ではない。このAWACSの購入はブッシュが来日した九二年一月の日米首脳会談の「アクション・プラン」に盛り込まれており（この種の声明に具体的武器名が登場するのは極めて異例）、貿易摩擦でのアメリカの怒りを武器購入でなだめようという日本政府の願望がある。しかし武器の取引は単なる商売の思惑を超えて、兵器のいわば「背後霊」も輸入することにつながる。

その問題点を具体的に言えば、（1）コンピューターの塊であるAWACSの運用ノウハウ（ソフトウエア）はアメリカからブラックボックスの形で導入されるため、自衛隊が情報・指揮・管制の面でいっそう米軍に従属する。端的に言えば、「司令室」を乗っ取られる訳だからAWACS導入で航空自衛隊は

（十ページ下段へ）



青木雅彦
京都／反戦ドタバタ会議

1988年６月18日
第三種郵便物認可（通巻86号）

UNTACは誰のため？

PKO第二次派兵反対の声で自衛隊北部方面隊を包囲しよう！

私たちは、日本が再び加害者になってはならない、「国際貢献」でなく民衆の連帯をとの立場でPKO法に反対し続けてきました。しかし、3月下旬には、国内有数の陸上部隊の配置されているこの北海道からカンボジアへ、自衛隊北部方面600人の派兵がされようとしています。

現地のカンボジアでは、パリ和平協定の枠組みそのものが崩壊の危機に瀕しています。和平プログラムの実行はいたるところで行き詰まりを見せ、各派の対立が進んでおり、公然たる内戦の再開という最悪の事態に進む可能性はきわめて高いと言わざるをえません。また、当初カンボジア民衆が抱いていたUNTACに対する期待感は失望と批判にとって変わっています。

これらは「参加五原則」を盛り込んだ日本のPKO法に照らしても、すぐさま業務を中止し、自衛隊を撤収させるべき状況です。しかし、佐川スキャンダルの腐敗にまみれた日本政府は、こうした判断を下さないばかりかUNTACの要請があれば、現在行っている国道二、三号線の補修工事からさらに一歩踏み込んだ危険な業務に自衛隊を出す構えすら示しています。

即時撤退を

このままでは、自衛隊はズルズルと内戦の泥沼にはまり込んでしまいかねず、もしそうなれば、新たな軍国主義をめざす勢力は、ここぞとばかり、法の不整備を叫び、自衛隊の海外での武力行使を可能にするために、改憲を声高に叫ぶことになるでしょう。

私たちは、こうした状況を見るとき、今こそ、自衛隊のカンボジアからの即時撤兵を声高くして主張し、大きな世論にしていくときだと考えます。

また私たちは、同じ道民として、北部方面隊の隊員たちがみすみす政府の犠牲にさらされることを黙って見過ごすわけにはどうしてもいきません。（札幌の自衛隊人権一一〇番の電話相談にも、自衛官家族から深刻な相談が多数寄せられています）。

さらに、国内ではアイヌ民族の先住民族としての権利を認めず、内外に対して戦後責任をまったくとろうとしない日本政府に「国際貢献」を語る資格などなく、自衛隊海外派兵をやめて、真っ先にこれらの解決を

（十二ページへ）

油谷良清
送るな自衛隊！共同行動
実行委員会・事務局

鈴木茂樹
非核市民宣言運動ヨコスカ

再開されたチームスピリット

ためされる新海軍戦略

一月二十六日、韓国国防省は昨年中止した米韓国合同軍事演習「チームスピリット」を再開すると発表した。長期間にわたる事前の準備活動はすでに開始されている。

●　●

「チームスピリット93」は今後の米軍、特に海軍の方向を見極めるうえで大きな意味をもっていると私は考えている。

国防予算の大幅削減が確実な中で、陸・海・空軍そして海兵隊はそれぞれに自分の有効性を議会に訴え、予算削減に抵抗している。九二年十月一日、「From the Sea」と題された米海軍白書が公表された。白書は海軍の戦略が、On the Sea＝洋上における艦隊戦闘から戦力の陸上投射に重点を移したことを明らかにしている。九二年十二月のソマリアへの上陸作戦は海軍の特殊作戦部隊SEALと、海兵隊の監視・偵察・諜報チームが最初に上陸した。以上の動きが、直接今年のチームスピリットに影響をあたえるかどうかは要注目だ。

●　●

チームスピリットは、米・韓両国の陸・海・空・海兵四軍の早計二〇万近くに達する大演習である。再開発表にあたっては、演習の規模、期間はこれまでより縮小するとされているが、前に述べたような米海軍の戦略重点の移行で、その内容にどんな変化が生まれてくるのか。

注目しなければならないのは、指揮所演習を強化するとされていることだ。従来のいわば「物量作戦」から、湾岸戦争型の「ハイテク作戦」への変身が図られている。

たとえば、横須賀のトマホークは、常時北朝鮮の攻撃目標がインプットされていると思われる。このデータは戦局の変化に応じてリアルタイムで書き変えなければならない。そこで、司令部がいかに情報を素早く、適確に把握し、判断し、伝達するか、が非常に重要になってくる。

さらに「戦術核撤去宣言」以降、初めて行われる今回のチームスピリットは、戦術核兵器が演習前には韓国に無い、というまったく新しい状況を踏まえたものとなる。思い返せば、チームスピリットはベトナム戦争で敗北した米軍が、朝鮮半島で同じ様に泥沼に踏み込まないように、陸上兵力を本国に引き上げるかわりに、有事には大量の兵員を機動展開できることを韓国と世界に向けて宣伝し、朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」）を威嚇するために行ってきたものだ。したがって、当然のことながら、核戦力の展開が重要な柱となっていた。「戦術核撤去」が演習の内容に影響を与えるのは必至だ。模擬核兵器の移動訓練が行われるかもしれない。

●　●

チームスピリットは朝鮮半島に大きな緊張を作り出す演習である。軍事境界線の向こう側で二十万近い軍隊が攻撃訓練を繰り返しているのを平静に見ていることができるだろうか。韓国政府は、国際原子力機関（IAEA）の査察を北朝鮮が拒否していることを再開の理由にあげ、日本政府もそれに同調している。しかし、日本にある核さえチェックしてこなかった日本政府が、北朝鮮にだけ核査察受け入れを求めるのは、あまりにも一方的な態度というべきであろう。

◆◆

思いやり予算って何だろう？

その3（最終回）

その実態をあばくこと、伝えることこれが私たちの最初の仕事だ

●今年は、チームスピリット93が強行される。すでに一月の中旬から横田基地は、C－130輸送機による、二機もしくは三機編成でのタッチ・アンド・ゴーの訓練が始まっている。チームスピリット準備で恒例の訓練だ。これが結構うるさい。夜半までやっている。おまけに海兵隊岩国基地のハリアー攻撃機や、沖縄嘉手納基地のF15戦闘機までもよく飛来するようになった。チームスピリットの訓練が本格化して、これ以上横田基地がうるさくなるかと思うと、うんざりする。アメリカ本土か、さもなくば、どっか別の場所でやってほしい、とつくづく思う。どこかでやったとしても迷惑だろうが。

●二月十一日、ぼくたち福生市民連合は、恒例の「横田基地抗議・チームスピリットけしからん！タコあげ大会」を行った。メンバーのほとんどが風邪をひき、おまけに無風状態の悪コンディションの中、いくつかのタコが、C130輸送機に肉薄した。なかなか、飛行機は落ちないし、（落ちたら大変だが）止められはしなかった。しかし、本当に止められそうで気持ちがいい。

防衛庁長官の困惑

ところで「思いやり予算」の話の続き。九〇年頃の防衛庁長官が石川要三氏、横田基地に隣接する青梅市の市長だった人だ。この人が国会で「思いやり予算」についての野党の質問に答え切れず防衛庁の幹部役人に「説明のつかないものにまで『思いやり予算』などやるな！」と言った…という逸話が残っている。防衛庁長官でも説明に苦慮するほど「思いやり予算は多方面に広がった。このときの石川氏を怒らせたのは、基地のレストラン従業員の蝶ネクタイ代金だという。

しかし、「思いやり予算」で困惑しているのは、石川氏だけではない。国民たる私たち、納税者たる私たちが何よりその実態をほとんど何一つ知らされてはいない。何が「思いやり予算」なのかの意味も、中身も知らされていない。

米戦略への一体化

七八年に作られた「日米防衛協力のための指針」（『ガイドライン』）は実質的な安保の改訂と言われた。その中身は、アジア太平洋大の「防衛分担」を質的にも量的にも日本に押し付ける内容だった。といっても日本には憲法があるから、軍隊を海外に送るわけにはいかない。「じゃあ、金をだしなさい」「はい」。乱暴に言えばこうして出てきたのが「思いやり予算」。それは、アメリカの戦略の中へ日本が踏み込んでいく、踏み石の一つだった。

しかし、なかなかそこに私たちの目は行きにくかった。安保があるから、とにかく「安保が、みんな諸悪の根源」で片付ける。多少あきらめ的なこともあったかもしれない。

事実のつみ重ねが大事

今大事なことは、何がどう悪いのかを事実をきちんとおさえながら、考え、チェックし、巾広い議論を形づくることだ。安保協力の名のもとに拡大した、日米の軍事関係は、正常であるべき日米関係を阻害している。条約や協定の検証すらあやしくなっている。すくなくとも「思いやり予算」が「条約上の義務」などではないことは確かなのだ（第五号参照）。

九一年の湾岸戦争にしても、日本政府が日米安全保障条約を、自ら遵守し、アメリカに対して遵守させる意思と力と関係があれば、在日米軍基地はああまでやり放題に出撃基地として使えなかった。

最大の責任者＝日本政府

先号で紹介した梅林宏道さんの本「在日米軍」で明らかなように、アメリカ政府は完全に日本の「思いやり予算」を彼らの防衛整備の計画に組み込んでいる。「マッタク、人の国の税金を、何だと思ってるんだい、どこの国の金だ」と言いたくなる事実がそこにはある。しかし、アメリカに怒るのはいささか筋違い。米軍の公文書には、はっきりと「ホスト・ネーション・サポート」（受けれ国による支援）あるいはFIP（日本の支出による施設改善計画）という項目がある。条約に書かれていない財源をあてにするのは、けしからんことには違いない。しかし、それを支出することを決めているのは、あくまでも日本政府なのだ。

知ろう、そして伝えよう

あらためなければならないのは「思いやり」なんて名前でゴマ化しながら、レッキとしたアメリカ軍の軍費の一部を負担している、日本政府の政策だ。湾岸戦争のときの多国籍軍への戦費負担の九〇億ドルに憤った人は多かったが、この恒常的な、しかも具体的なアメリカ軍のための戦費の実態は、あまりにも知られていない。ならば、知らせることが、平和運動がまずやるべき仕事だ。

そのために、政府や防衛施設庁に対して「思いやり予算」の情報公開要求を世論としよう。自治体の情報公開制度を使ってその実態に迫るあの手この手の知恵も出し合おう。

納税者として

この原稿を書いている最中に、厚木、横田両公害訴訟の最高裁判決があった。ここで最高裁判所は、米軍機の飛行について「国の支配の及ばない」ものとして判断を放棄している。裁判所までが「安保があるからしかたがない症候群」に犯されている。何ということなのだろう。日本政府は、自分たちの決めた条約を守り、出来ないことはできないというあたりまえの関係すら、アメリカと作っていない。

ここはまず、安保条約・地位協定の中身をはっきりさせよう。その上で、日本の納税者、日本人も、在日外国人も、日本政府に税金を払うも

（十一ページ下段へ）

遠藤洋一
福生市民連合

モービルベイ・ノー・ウェルカム！

長崎の港に木の葉船団が舞った

一月十五日、反対の声を押し切って被爆の町にやってきたモービルベイ。でも、この町に軍艦を呼び寄せる何かがあるとしたら…。

川原重信
ピースバス長崎

新春早々の一月六日、新聞各社の一面にはプルトニウム輸送船「あかつき丸」の東海港入港が大きく報じられていたが、被爆地長崎にはもうひとつの衝撃が走った。米第七艦隊所属のイージス艦モービルベイが十五日から十八日まで長崎港に入ることが報じられたのだ。

●あぶない「親善訪問」

八九年九月核疑惑艦ロドニー・デイビスが寄港してから三年半がたつ。その時、被爆者の怒りは爆発した。艦長が平和公園に供した花輪を、抗議のために座り込んでいた被爆者団体の人々は、怒りをこらえ切れず踏み付けてしまったのだ。その足が震えていたのは怒りの深さの現れに違いなかった。

それにしても、この間の長崎寄港の経緯を振り返る時、米海軍の狡猾さには憤りを禁じ得ない。八六年十一月海難救助艦ビュフォードをかわきりに、八七年二月貨物揚陸艦セントルイス、八九年九月ロドニー、九一年十月セントルイス、そして今回の核搭載可能の最新鋭イージス艦と米海軍は寄港する艦船の戦闘性をエスカレートさせてきた。まさに、長崎市民感情を値踏みしながらである。

寄港目的はいずれも「親善と乗組員の休養」とされているが、真の狙いが長崎港の軍事利用化にあることは疑う余地がない。すでにモービルベイ入港時には長崎港の港勢（港の形状や水深、岸壁の状況など）、長崎の社会状況をきっちり調べていたことが判明しているし、長崎港には日本で唯一イージス艦を建造している三菱長崎造船の技術力が備わっている。米海軍にとって、母港化の利点は薄いとしても、修理基地としての魅力は長崎に備わっているのだ。

●佐世保のノウハウ

今回の入港に対し、被爆者団体や労働組合はいち早く抗議声明を発表し、入港撤回の申し入れを本島市長や高田知事に行った。その声に押されて、市長は知事に知事は米領事館に回避の申し入れを行った。寄港は、強行されたものの、市長も知事も公式の歓迎行事は行わなかったし、招待された艦上での昼食会にも出席しなかった。もっとも、市議会議長、県議会議長は出席して最大級の歓迎の辞を述べているのだが。

私たちピースバス長崎（三菱の兵器生産に反し平和産業への転換を求めている市民グループ）のメンバーもいつになく張り切ってしまった。従来にない取り組みをしようということで、ピースボート船団を発案した。しかし、具体的なことになると船がない、ノウハウがない、おまけに準備する期間もない状態で、提案を県労評センターに持ち込んだ。県労評センターでは手際よく話が進められ、三隻の遊漁船と七隻のゴムボートが手配された。海上デモのノウハウは海上保安庁との折衝まで含めて、海上行動経験豊かな佐世保地区労にお世話になった。佐保地区労の交渉力はたいしたもので、港内デモ許可はもちろんのこと、懸案だったゴムボートに乗り込む浮き桟橋も海上保安庁所有のものを使うことで話をまとめてしまった。

松ヶ枝岸壁・国際観光埠頭で。モービルベイは目の前、二〇メートルの岸壁をはさんで着岸した。抗議行動には佐世保の市民グループも参加。

●とにかく軍艦はごめんだ

さて、入港当日の朝八時。私達は手作りのノボリ（侵入禁止のマークを書いたもの）をたててゴムボートに乗り込んだ。幸い身を切る程の寒ではなかったが、何せ初体験のものばかり。ゴムボートも厚い皮のゴム風船を浮かべたようなものだから、少しでもバランスを崩した海に落ちそうで心許ないこと限りない。しかし、巨大な艦船が近づいてくるにつれ、私達のテンションも高まった。モービル・ベイ、ノット、ウェルカム！ノー、エントリー、フォー、モービル・ベイ！と舌を噛み噛み不安を忘れて大きな声を上げていた。

その声は艦上に届くはずもなかったのだけど、陸に上がってからは艦船が接岸してる岸壁で、翌日は原爆資料館まで水兵さんを追っかけてノボリを広げてアピールしたので少しは意思が通じたのではないかと思う。

ところで、スミス艦長は「訪問を繰り返すごとに、相互の理解が深まる」と、今後の入港継続を公言して出ていった。海上デモのノウハウは少しはつかんだので今度はもっとハデなデモをやってみたいなと思うこともあるけど、それはやっぱり困る。長崎には米艦船が来てもらっては困るのだ。米国に限らず日本の艦船だって困る。戦争の究極の惨劇を体験した長崎は、平和の意味を最も深く理解できるところであるはずだし、戦争と核の被害はもとより加害にも加わっていかないことが決意であるはずなのだ。しかし、現実には三菱長崎造船所ではイージス艦が建造され、魚雷が生産されている。それが米艦船の呼び水になっていることを今回如実に示され、私たちの抱える課題の重さを改めて感じている。◆

沖縄から
「アメリカの人々への旅」
1993・春
予告編

沖縄の日常的な軍事化状況は国内でも余り知られていないが、国外ではまったく知られていない。民主主義国「日本」の中、特定の限られた沖縄県で、軍事基地のために土地が強制使用され、米ソ冷戦の終了後、ホスト国の日本政府の手厚い財政援助と同意に基づいて住民地域での軍事演習が容認され、ますます激化している。冷戦後も「オキナワ人」は日本と米国の両大国のために引き続いて犠牲を強いられているのである。

●　●

このような沖縄の状況を国内外に伝えるため、私達は月間通信『沖縄から』とその英語版『OKINAWA VOICE』を発刊して詳細なことを発信しているが、この四月に沖縄の軍事基地問題を「人権と環境」の視点から直接に訴えようと米国ツアー「アメリカの人々への旅」を昨年十一月から準備してきた。

サンディエゴ、デンバー、ダラス・フォートワース、ワシントン、ニューヨークの五都市を十七泊十八日間で訪ねる予定である。

それぞれの地域において受け入れ体制をつくり、市民運動団体・教会関係者・平和問題研究者などとの小さい懇談や広く市民の参加できるフォーラムなどを予定している。

これらのプログラムが、沖縄基地問題をアジア・太平洋の軍縮の課題としていくための米国と沖縄の平和運動団体の相互交流のスタートになればと期待している。

サンディエゴの日程は、多くの団体の協力で運営されている「サンディエゴ平和資料センター」を中心に取り組まれており、到着翌日四月十八日（日曜日）の教会での昼食会を皮切りに午後のサンディエゴの軍事基地状況と平和経済転換プログラムの説明、晩の会合、翌十九日は、午前中の各種団体との意見交換、午後は二時間のハーバー・クルーズによる海軍基地視察、晩はパブリック・フォーラムという忙しい日程となっており、二十日がフリーの移動日となっている。

●　●

コロラド州デンバーでも同様に、教会関係者を中心にデンバーの多くの平和団体に呼びかけて「沖縄からの平和グループ受け入れ準備委員会」が結成され、準備が進められている。「宇宙空間の平和のための市民」とか、「核戦争を防ぐコロラド協議会」などという草の根団体にも呼びかけられている。

デンバーでは、各種交流会の他に神学大学で沖縄キリスト教会メンバーからの講演、教会でのスピーチ、デンバー選出議員等へのコンタクトが行われる。選出議員には、パット・シュローダー下院議員やネイティブ・アメリカンから初の上院議員となったベン・ナイトホース。キャンベル上院議員、クリントン政権で新設の地球規模問題担当次官として環境や人権などを担当するワース前上院議員がいる。私達はデンバーやワシントンの彼らの事務所で会えることを楽しみにしている。他に、いくつかの政府機関やグリーン・ピースなどの平和運動事務所を訪ねようと思う。

ニューヨークでは、米教会本部関係者との会合、国連への訪問などを予定している。

●　●

このように日程が各地で組まれており、沖縄サイドの責任者として準備に多忙な毎日である。沖縄からのメンバ＊以外には、オブザーバーとして梅林宏道氏が参加する。旅の内容については、ツアー後に紙面で報告したい。

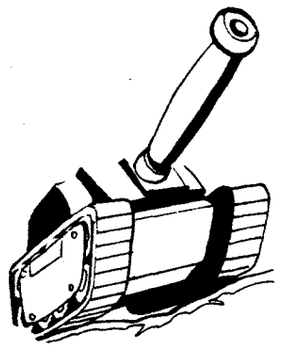
伊波洋一
「沖縄から」編集委員

（三ページから）

米空軍第×戦術航空団になる。（2）現在ボスニアでの「停戦監視」でAWACSが使われているように、自衛隊もPKO任務にこの飛行機を「使わざるを得なく」なるだろう。司令機を紛争空域に持ち込むことは直接介入にほぼ等しい。また、長期的な問題としては、今年の予算で「大型輸送艦」（搭載能力これまでの3倍）が認められたこと、AWACSは空中給油機を必要とすることなどを考えあわせると、（3）AWACS導入は遠く海外での「制空権」を確立できる「外征軍」としての能力を持つことにつながる。

自衛隊に「海外侵略」の意図があるかどうかは議論が分かれるかもしれない。だがその「能力」をこれから手に入れようとしているのは明白である。

◆つづく



（七ページから）

のの立場として、公金の不当かつ不法な支出としての「思いやり予算」を今年度からでも止め、国民納税者に返せという訴訟だって考えなければなるまい。

◆　◆

アジア太平洋には軍縮の風がなかなか吹かない。それどころか朝鮮半島では緊張がつづき、中国、ASEAN諸国などでは新たな軍拡熱が高まり、資源やお金が人々のためでなく、軍備に注ぎ込まれている。その要因に、「思いやり予算」に支えられた米軍の前進配備があるとすれば、ことは私たちのフトコロだけの問題ではないはずだ。

◆
◆

原子力艦入港情報

（51）

92年12月25日〜93年2月18日

P級＝原子力潜水艦パーミット級
S級＝原子力潜水艦スタージョン級
L級＝原子力潜水艦ロサンゼルス級

93年

◇1月4日　09：59原潜ヒューストン（L級）横須賀を出港。
◆1月21日　10：56原潜ガーナード（S級）横須賀に入港。
◇1月31日　11：47原潜ガーナード（S級）横須賀を出港。
◆2月1日　10：00（県の記録。新聞では10：30）原潜ヒューストン（L級）ホワイトビーチに入港。
◇2月4日　10：10原潜ヒューストン（L級）ホワイトビーチを出港。
◆2月6日　13：12原潜ヒューストン（L級）横須賀に入港。
◆2月9日　13：50原潜アスプロ（S級）横須賀に入港。
◇2月16日　12：24原潜ヒューストン（L級）横須賀を出港。

●1993年1月1日から2月18日の各地への原子力艦入港回数は

横須賀	3回（うち原潜3回）
佐世保	0回（うち原潜0回）
ホワイトビーチ（沖縄・勝連町）	1回（うち原潜1回）

1988年6月18日第三種郵便物認可（通巻86号）
1993.2.20　No.7　月刊キャッチピース

（四ページから）
図ることこそ必要だと考えます。
同時に私たちは、カンボジア民衆の自立に本当に役立つ民衆レベルの協力・連帯の道を今こそつくりあげるべきだと考えます。

北海道に集まろう

このような思いに立ち、私たちは、自衛隊北部方面隊派兵に反対する一大行動を、全ての人々の力を結集してつくり上げたいと思います。
第一次派遣時と違い、すでにカンボジアに自衛隊が派兵されている中での今回の行動では、既成事実の積み重ねによって反対世論を下火にしようとする政府の意図をくじくためにも、「派兵に異議あり！」の声をこれまで以上に大きく示すことが重要な意味を持っています。
そこで私たちは、それぞれのグループ・個人の自立した運動をお互いに尊重し合い、発展させながらも、最大の山場となる北部方面隊の派遣時に、労働組合、市民グループ・個人すべての力を結集して北部方面隊を包囲する一大共同行動を、道内の仲間、全国の仲間と共に、ぜひとも実現したいと思います。
全国の皆さん、ご参加・ご協力をお願いします。◆◆

おくるな自衛隊！
共同行動

3／27（土） 人間の鎖

●札幌の北部方面隊総監部を包囲します●集合場所・時間は未定
●参加できない人もメッセージ、リボンを！

3／28（日） 全国交流会

［問合わせ先］☎011(219)0112 FAX(219)0113 市民ネットワーク北海道内「共同行動」実行委員会

軍縮と地域おこしを考える
名寄フォーラム

［主催］名寄地区労働組合☎01654(2)3440　東京実行委員会　☎03(3215)3668（国労会館内）

3／27（土）　名寄市民文化センター

自衛隊軍縮・基地撤去を地域経済の転換や活性化と一体のものとして実現するために、「自衛隊城下町」名寄で考えます。

編集室から

●ビルマ（ミャンマー）の民主化を求めてたたかう在日ビルマ人たちと友達になった。忙しいのにまたウロウロ彼らの支援を始めた。今頃になって「民主化」という言葉の意味がやっとわかりかけてきたような気がして。マグティン、ガンバッテ。（え）
●（ま）君はハナミズをたらしながらラッパを吹きかつワープロをこんちくしょうと叩き、（た）は原因不明のジンマシン全面攻撃に、わー、かゆいよー、とのたうちまわる今日このごろであった。（た）
●会計報告は次号でまとめて行います。

月刊キャッチピース
（月刊トマ喰い虫改題）
No．7（通巻86号）
1993年2月20日発行

発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース
発行所●〒223 横浜市港北区箕輪町3－3－1
☎045（563）5101
FAX045（563）9907
郵便振替●東京6-136148「キャッチピース」
編集●キャッチピース編集部
定価●100円（通信会員年間3000円）